

### 1. アンダルシア音楽とはなにか。

アンダルシア音楽とは、イスラム王朝下のイベリア半島(=アンダルシア地方)で、9世紀から15世紀頃までのあいだに完成したアラブ古典音楽の総称である。この音楽伝統の起源はアッバース朝時代のバグダードに遡る。バグダードでは当時、アラビア半島に発したアラブの音文化がペルシアやギリシアなどの音楽文化と邂逅して、コスモポリタンな音の世界を展開していた。このいわば「世界音楽」をバグダードからコルドバにもたらしたのが通称ズィルヤープ(本名アブー＝ル＝ハサン＝アリー＝ブン＝ナーフィウ)と呼ばれる9世紀の大音楽家である。バグダードなど東方アラブ世界の芸術音楽がその後トルコ音楽の強い影響を受けて大きく質的变化を遂げるのとは対照的に、西のアンダルシアではバグダードの伝統が保持され、ズィルヤープに続く多くのイスラム教徒とユダヤ教徒の音楽家たちが理論的な完成度を高めた。そして折からのカトリック教徒によるレコンキスタに追われてジブラルタル海峡を渡ったこの音楽伝統は、モロッコからチュニジアに至る北アフリカ各地の地中海沿岸諸都市の人々に受け継がれ、故郷アンダルシアの地を失ってから後も「アンダルシア音楽」と呼ばれ続けた。その後チュニジアやアルジェリア東部ではこの伝統もオスマン朝の影響下でまたトルコ化してゆくが、アルジェリア西部からモロッコにかけては、オスマン支配を免れたため、本来の形態がほぼそのままに維持されて今日に至っている。このように、モロッコのアンダルシア音楽は、さまざまな土地をさまよったアラブ音楽がほぼ原型を保って辿り着いた終着点といえる。

欧米の研究者のなかには、「アンダルシア」がスペイン人の土地であるとの認識から、この音楽伝統をあえて「アラブ＝アンダルーシ音楽」と呼んで、スペイン文化と混同されるのを避けようとする傾向がある。だが私はこの音楽文化の担い手である北アフリカの人々自身が用いる呼称を尊重し、そのまま「アンダルシア音楽」としておきたい。

### 2. アンダルシア音楽の基本的しくみ

この音楽体系の骨格は旋法とリズムの組み合わせである。

#### (1) 旋法

旋法とは、曲を構成する音の高さの間隔を決める方法である。主音(=終止音)を軸にして通常3～5個の異なった高さの音が一つのセットとなる。これを旋法(タブク)と呼ぶ。旋法を構成する個々の音の高さは、音階という概念が導入された現在では、それぞれ音階上の一定の位置によって示される。ただし、音階を作り上げる各音のあいだの高さの間隔(=階段の段差)は、4分音や8分音を多用するトルコ音楽に影響されなかったモロッコでは、ほぼヨーロッパ古典音楽のそれに比定されるが、厳密には中世アラブ音楽を踏襲する独自の異なったものである。

モロッコに現在残っている旋法は25種類で、それぞれに固有の名称が付与されている。それは旋法の発生地の名であったり、音高の名称であったり、あるいは人名であったりと、さまざまである。これら25の旋法はさらに11のグループに集約され、このグループが「ヌーバ」と呼ばれる。ヌーバの名称には、各グループを代表する旋法の名称が充当される。このように、モロッコには25の旋法から成る11のヌーバがあるということになる。

## (2)リズム

すべてのヌーバは、共通する5種類のリズムと組み合わせられることによって、はじめて演奏可能となる。リズムは「ミーザーン」と呼ばれ、5種類それぞれに固有の名称が与えられている。かつてアンダルシアの地では4種類のミーザーンだけが用いられていたが、18世紀以降モロッコで1種類が付加され、現在では計5種類が存在する。

アンダルシア音楽の演奏に際しては、ミーザーンが演奏の単位(いわば曲目)を示す名称にもなる。たとえば「ラマル＝ル＝マーヤ」という名称のヌーバを「クッダーム」という名称のリズム(ミーザーン)と組み合わせ、『今夜演奏されるミーザーンはラマル＝ル＝マーヤのクッダームです』などと紹介される。11種類のヌーバそれぞれに5種類ずつのミーザーンが用意されているのだから、総計すれば55のミーザーンが存在する計算になるが、そのうち2個が欠如しているため、実際には53のミーザーンが現存する。ひとつのミーザーンの演奏には、少なくとも数十分を要する。

## (3)歌詞

アンダルシア音楽はオーケストラによる楽器の演奏が舞台上では目を引くが、実は基本的には歌唱が根幹におかれている。歌われる詞(詩)はその形式にしたがって4種類に分類される。アラブの伝統的な規則に則った古典詩である「シウル」、11世紀にアンダルシアで開発された新たな韻律法による「ムワッシャハ」、さらにムワッシャハとアンダルシア口語が融合した「ザジャル」、そして口語詩である「バルワラ」とがある。いずれもが母音の有無のパターンから成る韻律学(アルーダ)上の規則に従って作られていて、パターンごとに「バハル」と呼ばれるグループにまとめられる。バハルには主要なものが10種類、副次的なものが6種類、計16種類がある。

## 3. 宿題と展望

アンダルシア音楽の根幹を支える詩のリズム「バハル」が音楽上のリズムであるミーザーンとどのように対応しているか、またそれが旋法といかなる関係にあるのか。これが現在の私の研究の最重要な宿題である。幸いにして、18世紀の大音楽家ハーイクが当時の歌詞を集大成しているのに加え、20世紀を代表するアブドゥ＝ル＝カリーム＝ツラーイスがやはり自分の時代の歌詞を集大成し、いずれもが刊本となって手元にある。現在の演奏家たちも利用しているテキストである。これらに収録された詩を詳細に比較分析することによって、上述の宿題はある程度解決されるように思う。そしてその先に待ち構えるのは「音楽は詩(＝言語)の束縛から自由になれるのか」、さらにいえば「音楽は国境(文化)を超えるのか」というロマンティックな問いかけである。見通しとしては、否定的な感じを持っている。